

— 1 —
次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

陽一は中学時代、バスケットボールの才能を買われ、名門H校に特待生で入学した。入学後にひどいイジメにあい、陽一の父親は学校に怒鳴（どな）りこみ、イジメをした生徒と岩田コーチをしかった。結局陽一はバスケットでは無名のT校に転校した。大会の決勝戦でT校とH校は対戦した。H校はT校に勝つためにきたないプレイでしたが、激戦（げきせん）の末、T校はH校をやぶり、優勝を果たした。以下は、その大会後T校とH校が練習試合をする場面である。

土曜日の朝、体育館は鈴（すず）なりの見物人で身動きができないぐらいだった。父兄（ふけい）の応援（おうえん）席には陽一の父の姿もあった。

午前九時、H校バスケット部員が体育館に入ってきた。

「あっ」

H校を知るだれもおどろいた。全員がつるつるに近い丸坊主（まるぼうず）になっていたのだ。そして、一番おどろいたのは彼（かれ）ら^①をヒキいる岩田コーチも坊主頭になっていた。そして、制服姿のH校部員たちはユニフォームに着がえることなく、陽一たちの前に整列した。

「この前に試合で、きたないプレイをして、どうもすみませんでした」

総勢三十五名の部員たちが、青白くなった頭を深々と下げた。T校の面々^②はイガイナ^③テンカイに言葉を失ってしまった。

「陽一君、一年生るとき、君をイジメたことを許してもらえないだろうか」

岡田（おかだ）、梶原（かじわら）、武田（たけだ）ら九人が一歩前に進み出て、頭を下げた。彼らの態度から、本当に心からアヤマ^④っているのが伝わってきた。

「【 A 】そんなことより、今日の練習試合よろしくお願いします」

「陽一君、ありがとう。そう言ってもらえて。ぼくも救われたよ」

岡田の顔に笑顔（えがお）がもどった。^{*} 能面のような顔をしていた彼らの顔に、高校生らしい笑顔がもどった。応援席に座（すわ）っている陽一の父親の口元も心なしか「B」。

「お父さん」

陽一の父親の前に岩田コーチが立っていた。

「陽一君のことも、先日の試合も、まことに申し訳ありませんでした」

岩田コーチも深々と頭を下げた。

「1」

眼鏡の奥（おく）の父親の目が「C」。

「私がまちがっていました。私も学生時代、バスケットの選手をしていて、中学、高校、大学と勝つことしか教えられてきませんでした。なぐられたりけられたりは日常茶飯事（さはんじ）でした。そうやって教えられて、私たちは強いチームになっていきました。私はコーチになったとき、何の迷いもありませんでした。私が教わってきたのと同じことをすれば、強いチームが作れると思いました。お父さんが私をしかつたとき、正直、何を素人（しろうと）がと思いました。私は全国三位という名声の上に胡坐（あぐら）をかいていたんだと思います。自分がすべて正しいと思いがついていたんだと思います」

「ありがとうございます。分かってくれたんですね。先生、日本一の優勝チームの監督（かんとく）になるより、もっと大事なことがあるんです。子供たち全員が、高校時代にバスケットをしていて本当に楽しかったと思えるそんなチームを作ることが大切なんです。先生のバスケットに対する情熱はすばらしいものだと思います。その情熱を勝利以外の所に向けてほしいのです。理想論かもしれませんが。ただ私が思うのは、勝利はあくまでも副産物にしかすぎないということです」

「ありがとうございます」

「先生、先生ならきつと日本一のコーチになれると思います」

「はい、本当の意味での日本一のコーチを目指してみます」

陽一の父親は、初めてスポーツにたずさわっている人間の「D」一心にふれたような気がした。人は深く話し合えば分かりあえるということを知った。

（試合を見て来て良かった）

陽一の父親は、「E」一気持ちで椅子（いす）に深く座り直した。

軽いウォーミングアップの後、練習試合が始まった。前回の試合のように、T校が一方的に先行するようになってんかいにはならなかった。メガネの速攻（そっこう）は封（ふう）じられ、俊介（しゅんすけ）も簡単にはスリーポイントシュートを打たせてもらえなかった。ファールの少ない奇麗（きれい）な試合内容だった。H校部員は楽しそうにのびのびとプレイした。

「武田、いいぞ、その調子」

ベンチのムードも変わった。岩田コーチは一度も怒（おこ）りはしなかった。むしろH校のナイスプレイに拍手（はくしゅ）をし、彼自身、試合を楽しんでいるようだった。

ハーフタイム、三十八対二十九でH校がリードしていた。T校で彼らに通用しているのは、陽一と健太だけだった。健太のパワーは、やはり計り知れないものがあつた。フリースローの二点だけにおさえこまれた岡田は、大きく肩（かた）で息をしていた。丸めた頭からも玉のような汗（あせ）が吹（ふ）き出ている。「2」

「岡田、いい練習になるだろう」

岩田コーチは彼を、日本を代表するセンタープレイヤーに育てたかった。健太のあのパワーは、外国人のパワーに匹敵（ひつてき）する。日本のバスケットはキキに瀕（ひん）している。世界選手権でも、北京（ぺきん）オリンピックの出場権を賭（か）けたアジア大会でも、かんばしい成績を残せなかった。次の世代の選手を強化することがキユウムである。岩田は岡田に期待していた。身長も技術も高校生なら彼の右に出る者はいない。パワーもナンバーワンだと思っていた。健太を見るまでは。岩田はT校に負けたとき、腹が煮（に）えくり返るほど怒っていた。期待していただけに岡田のふがいなさに腹を立てた。家に帰り、ビール片手に試合のビデオを何度も見た。岡田に非（5）はなかった。桁（けた）外れのパワーに対して、必死（7）のギョウソウで戦っていた。

「 3 」

なぜ負けたのか、岩田はビールを飲む手を休め、冷静に分析（ぶんせき）を始めた。個々の技量では完全にH校の方が上である。体力だつて、豊富な練習量にウラヅけされたH校の方が上まわっている。なぜ負けたのか。

岩田は陽一のプレイに注目した。かなりうまくはなっていた。しかし、武田だってあのぐらいのプレイはできる。なぜなのか。

陽一を見ているうちに、彼の父親のことを思い出した。

「心技体って言葉を知っているのか。心が何で一番上にきているのか、よく考えてみる。心があつてこそその技や体だからだ。心のない者が何をやるうが、そんなものは大した意味はない。なぜなら心が通っていないからだ。心を鍛（きた）えなおしてこい、この馬鹿（ばか）者め」

岩田は、自分が怒られているような気がした。岡田や武田たちの顔を見た。能面のような顔をしている。心が、血が通ってない顔だ。

「 4 」

心か。

答が出たような気がした。

「馬鹿野郎（やろう）、それでもキャプテンか」

画面から、自分の怒声が聞こえてきた。

「何やってんだ。お前ら馬鹿か」

怒声は、なおも続く。

自分の声に選手たちが萎縮（いしゆく）*（いしゆく）していくのが見てとれた。

「 5 」

岩田はコーチングについて、もう一度考えてみようと思った。選手たちが持っている力を全部出しきれるような、そんなチーム作りを目指そうと思った。

「 6 」

ラフプレイを続ける教え子たちを見て、本当にそう思った。教えるというコーチングの道をきわめようと思った。岩田は、

「 F 」にT校に電話し、練習試合を申しこんだ。

松崎（まつざき）洋の文章による

*能面 日本の伝統芸能の一つである能楽に用いる仮面。

*日常茶飯事 毎日のごくありふれたこと。

*かんばしい 好ましい。

*萎縮 元気がなくなること。

問一

——線①～⑧のカタカナの部分の漢字に直しなさい。

問二 線①「岡田の顔に笑顔がもどった」とありますが、この時まで岡田はどのような気持ちでいましたか。二十五字以上三十五字以内で書きなさい。

問三

「 A 」に最もよく当てはまる言葉を、次の中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア あの時は、とてもつらくて傷ついたんだよ。

イ イジメはいけないことだから絶対にしないでくれ。

ウ もう、そんな昔のことは忘れてしまったよ。

エ 君たちは、どうしてほくのことをいじめたの。

問四

「 B 」に最もよく当てはまる言葉の組み合わせを、次の中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア B こわばった C 涙（なみだ）をうかべた

イ B ゆるんだ B やわらいだ

ウ B ほころんだ C ひきしまった

エ B はずんだ C するどくなった

問五 ～～～線2「私がまちがっていました」とありますが、岩田コーチは自分の何がまちがっていたと言っているのですか。その内容として、最もよいものを次の中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 生徒に楽しいプレイばかりをさせていたこと。

イ 生徒がイジメをしていたのを許したこと。

ウ 全国で三位になり、胡坐をかき、楽をしたこと。

エ 生徒に勝つことしか教えてこなかったこと。

問六 ～～～線3「本当の意味での日本一のコーチ」とはどのようなコーチのことですか。「～コーチ。」につながる形で、五十五字以上六十五字以内で書きなさい。

問七 「 D 「 E 「に最もよく当てはまる言葉の組み合わせを、次の中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア D 清らかな E すがすがしい

イ D おだやかな E 軽々しい

ウ D たくましい E 重々しい

エ D さわやかな E うやうやしい

問八 ～～～線4「岡田、いい練習になるだろう」とありますが、岩田コーチはどのような気持ちでこのように声をかけたのですか。岩田コーチの気持ちをわかりやすく説明しなさい。

問九 ～～～線5「非」とはどのような意味ですか。五字以内で説明しなさい。

問十 「 F 「に最もよく当てはまる言葉を、次の中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア T校に借りを返すため

イ 選手を信じるため

ウ T校に教えるため

エ 一から出直すため

オ 陽一にあやまるため

問十一 文章中の「 1 「 6 「に次の一文を補うとすると、どこが最もよいですか。補う場所を一つ選び、その番号を書きなさい。

負けてよかった。

問十二 岩田コーチはT校にどうして負けたと思いますか。その理由を十五字以内で書きなさい。

【一】今ここで、アナウンサーの私に求められているのは、「話し方」について書くことだろう。だが、「話し方」だけがどんなにすぐれていても、それだけで「美しい日本語」にはならないのはいうまでもない。そこでまずは、私の考える「美しい日本語」について。

【二】三十六年余りのNHK生活の中で、私は数え切れない人々に会い、話を聞いた。^①シンソコ^②感動する話を聞くことも少なくなかった。そんな話に共通していたのは、自分の体験を通して学んだことを、自分の頭で考えた言葉で、かざらず正直に語ったものだったということだ。その人にしか語れない、その人ならではの発見に満ちた話は、胸に深くしみいるようで、本当に美しいと思った。つまりはそつちよくに語られる「自分の言葉」こそ美しいと、私は思っている。そしてそんな言葉は、その内容にふさわしく、その人らしい魅力的（みりよくてき）な語り口で伝えられたものだ。では、どんな「話し方」が魅力的なのか。ここからは、美しい「話し方」について、私のセンモンの音声の面から考えたい。

【三】初めて乗る路線の電車で、車掌（しゃしょう）さんがフガフガと鼻にぬける声で、奇妙（きみょう）な節をつけ、気持ちよさそうにアナウンスしていた。降りるべき駅がいくつ目なのか、急行に乗りかえる方が良いのかどうか、私は緊張（きんちょう）して聞いていたが、かんじんなことが少しも分らない。まったく「子供の電車ごっこ」じゃないんですから、まじめにやってほしいものです。これなんぞ「美しい話し方」の対極^③だろう。なぜこういうことが起こるのか、その元凶（げんきょう）は、車掌さんが自分が話すことの目的をきちんとネントウ^④においていないこと。だれに何を伝えるために、今自分はアナウンスするのかを意識していれば、おのずから声も、発音も、イントネーションも変わってくるはずだ。初めてこの電車に乗った乗客にも、駅名がはっきり聞き取れるような明りような発音で、聞きやすい声で、分かりやすく説明しようという親切心があれば。

【四】「美しい話し方」の第一歩は、まず「相手に伝える」ということをきちんと意識するところから始まる。

【五】歌舞伎（かぶき）の世界では昔から「一声、二顔、三姿」などと言って、役者の顔や姿よりも「口跡（こうせき）」を大事にしていたという。口跡、つまり発声・発音や台詞（せりふ）まわしなど「話し方」に通じるものだ。「美しい話し方」をする上で「声」は、それだけ重要な要素なのだが、では良い声とはどんな声だろう。

【六】先日もあるクウコウ^⑤の土産物屋（みやげものや）の店員さんが、やたら元気に大声で応対してくるのには閉口^⑥した。おそらく「大きな声で」と教育されているのだろう。しかし目の前の客と話すのにそんな大声は必要ない。だれに話すのか、ここでも「相手」を意識すればおのずから声の大きさも決まるはずだ。遠くの人やダイカンシユウ^⑦に向かえば、そこに届く大きな声で。かたわらの恋人（こいびと）に話すのならささやくような小声で。その場にふさわしい声の大きさも大事だ。

【七】良い声とは、必ずしも美声ではない。ひびきすぎる美声は、不自然で、むしろうさんくさく聞こえる。そう、私の考える良い声とは、「自然な発声」による声。人間の肉体の生理にかなう、どこにも無理な緊張（きんちよう）がなく、最小のエネルギーで最大の声が出せる方法。これこそが説得力のある声だ。しかし、これをつかむのは容易ではない。

【八】新人だったころの私は、十五分間のニュースが読めなかった。下読みをふくめれば一時間近く、声を出し続けることになるが、最後にはかすれた声で、息絶え絶えになっていた。声帯に負担のかかる不自然な発声法だったのだろう。そんな私が、今では二時間でも読み続けることができるようになった。その体験からいえば、「良い声」を出そうと思つてうまくいったためしはない。むしろ虚心（きょしん）に、どうすれば聞く人に意味が伝わるかを考え、「伝える」ことにせねんすることによって、自然な発声法が身についた。発声は、のどだけでなく、胸やおなかや背中、首のキンニク^⑧まで使う全身運動だといわれる。人間が運動するとき要（かなめ）になるのは腰（こし）。私も「腰で読む」感覚をつかんだとき、自然な発声法もつかめたような気がする。

【九】明りような発音や歯切れの良さも「美しい話し方」の大きな要素だ。最近の若い人は、「サ行」の発音が英語式の「th」の音になっている人が多い。日本語の「サ」とは、舌の位置がちがうのだ。前歯のうら、歯に近い歯ぐきのふち当たりに舌先を当てるよう指摘（してき）すると、改まる。「タ行」は「サ行」よりも舌先の位置がもう少し奥（おく）。「ラ行」はさらに奥。正確な舌の位置を知れば、正しい発音になる。昔は大きく口を開けて発音するようになられていたが、今はむしろ、大きく開けすぎず、舌や口をよく動かすよう訓練する。速く正確な発音には舌やくちびるのすばやい動きが欠かせない。そのトレーニングは「バラピリプルベレポロ」、パ行はくちびるの、ラ行は舌の動きをうながす。さあ、みなさんもいっしょにどうぞ。

【十】私が今、公共の場のアナウンスで一番気になっているのが、イントネーションのこと。「四歳（さい）のお子さまがまいごになっています」などというデパートでのアナウンスを聞いていても、まっすぐふつうに言えばいいところを、やたらに音を上げ下げしている。日本語の

特徴（とくちょう）は、音の高低によって意味を表すこと。「きれいな赤いバラ」は「きれいな」「赤い」「バラ」、どの語を高く話すかで、意味が変わる。だから不用意に音を上げ下げすると、シンイが伝わらなくなるのだ。自然なイントネーションにするには、日常会話の中では、自分がどうしゃべっているかを思いうかべればいい。ふだんは、だれでも無意識に自然なイントネーションで話しているのだから。ところが、改まった場で緊張したり、書かれた文章を「読もう」とすると、不思議に奇妙なよくようがついてしまうのだ。基本は「ふだんの話し言葉」なのである。

【十二】縷々（るる）述べてきたように、「美しい話し方」の決め手は、自然な発声や自然なイントネーションなど、「自然」であること。だが、それがいかに難しいか。「自然」は、手をこまぬいていて自然に手に入るものではない。努力が必要だ。私自身も、最近、自分の日常会話の録音を聞いてがく然とした。もっとふだんの話し言葉をみがかなくっちゃ。みなさんも、まずは自分の話し方を聞いてみるところから始めてはいかがですか。

山根基世（もとよ）の文章による

*イントネーション 話すときの声の上がり下りの調子。

*縷々 こまこまとしたさま。

問一 線①～⑦のカタカナの部分の漢字に直しなさい。

問二 線1筆者の考える「美しい日本語」とはどのようなものですか。文章中から探して二十字以内で書きなさい。

問三 線2「感動する」と同じような意味を表している言葉を文章中から十字以内で探して書きなさい。

問四 筆者が感動する話の条件としてあげていることを三つ書きなさい。

問五 線3「対極」とは、この文章ではどのような意味で用いられていますか。わかりやすく説明しなさい。

問六 線4「閉口した」とはどのような意味ですか。最もよいものを次の中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 息を止めてしまった

イ まいってしまった

ウ ありがたいと思った

エ 心の中に不安をもった

問七 線5「良い声」とは、ここではどのような声のことですか。わかりやすく書きなさい。

問八 線6「不用意に音を上げ下げする」のはなぜですか。その理由を文章中から探して書きなさい。

問九 この文章を意味のまとまりから五つに分けるとすると、どのように分けられますか。最もよいものを次の中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 【一】：【二】：【三】【四】【五】【六】【七】【八】【九】：【十】：【十一】

イ 【一】【二】：【三】【四】【五】：【六】【七】【八】：【九】【十】：【十一】

ウ 【一】：【二】：【三】：【四】【五】【六】【七】【八】：【九】【十】：【十一】

エ 【一】【二】：【三】【四】：【五】【六】【七】【八】【九】：【十】：【十一】

[illegible]

受験番号